学習展開事例２

地域に伝わる物語を学習に活かす取り組み

～　秋田県八郎湖流域　～

秋田県八郎湖周辺での学習を紹介します。八郎湖（八郎潟）は男鹿半島の付け根に位置し、昭和32年から行われた干拓事業が実施されるまでは、日本で2番目に大きな湖でした。かつては漁獲量が豊富で、湖の周囲では佃煮加工も盛んに行われてきました。しかし、干拓や護岸工事、水門の設置などによって環境が悪化し問題となっています。

また、流域では、人口減少による過疎化や耕作放棄地の増加、森林の荒廃などの問題も生じています。環境保全と共に地域の活性化や担い手育成が喫緊の課題となっています。

八郎湖流域では、未来に向けて地域の自然や文化を継承する担い手育成が特に重要なテーマとなります。ここでは、地域に伝わる物語（民話）の力を活かした環境学習を紹介します。

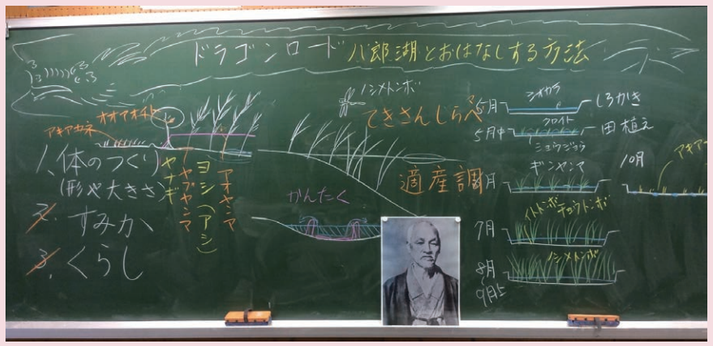
～物語の力で湖と流域全体を捉える～　人々や湖をめぐる大きなつながりを象徴する竜

八郎湖の環境問題は、湖のみならず流域全体の多様な問題が複雑に絡み合って生じています。このような実態を理解するためには、まず湖と流域を一体のものとして捉えることが必要です。しかし、そのような目を持って地域を見直すことは、大人でも容易ではありません。そこで、子ども達には物語を通して湖と流域を結び付け、未来へのビジョンを考える学習に取り組んでもらいました。

広大な湖と流域を一体のものとして捉え、問題の解決や未来へのビジョンを考える学習を行うには、初めに、地域を支える大きなつながりに気付くことが必要です。湖や人々をめぐるつながりは複雑で全体を理解し説明することは不可能ですが、イメージや象徴を通して感じ取り伝えることなら可能です。

子どもたちが物語をとおしてイメージを共有することができれば、地域に眠る様々なつながりや価値、意味を発掘し、それらを自分の文脈で結び付けていくことができるようになります。この学習で参考になるのが、地域に伝わる民話や物語です。

秋田県八郎湖流域では、地元に古くから伝わる民話「八郎太郎物語」を活かして、八郎湖の未来を考える学習を行っています。子ども達は、この物語に登場する主人公の竜（八郎太郎）との対話を通して、湖と流域を結ぶ大きなつながりをイメージとして共有します。



お帰り八郎太郎物語～共感を力にして新しい物語をつくる学習

この学習は、八郎湖の昔と今の違いを知ることから始まります。「八郎太郎物語」は自然が豊かで水も清らかであった昔の八郎湖を舞台に生まれました。

まず、八郎太郎物語を竜が住んでいた頃の話として位置付け、環境が悪化する前の八郎湖や流域の環境や人々の暮らしについて学びます。そして、環境が悪化して多くの生き物たちが姿を消してしまった今の湖を、竜がいなくなった湖と位置付けます。さらに、どのようにしたら竜が湖に帰って来るかを考えながら、湖の環境改善について話し合います。竜は、ここでは自然が豊かだった頃の八郎湖の象徴であり、湖と流域を結ぶつながり全体を表すイメージです。

昔の八郎湖の環境を取り戻し、竜を呼び戻すには、どうすればいいのでしょうか。まず、湖や流域に住んでいる生き物たちからヒントを得ます。生き物たちの生息を支える環境のつながりを学び、次にお年寄りから昔の人達の暮らしや自然について聞き取りをします。昔の暮らしから、自然と人とのつながりの大切さを学びます。それらの学習を通して、子ども達は自然や人のつながりを取り戻すことが、湖の再生に結び付くことに気付きます。そこから、竜を呼び戻すために皆で地域につながりを作る新しい物語「お帰り八郎太郎物語」へと展開していきます。

このような流れの中で、湖の再生や地域の活性化といった現実的で難しいテーマにも、子ども達は物語を作る学習を通して、イメージを共有しファンタジーを感じながら取り組んでいくことができます。そして、その過程で、子ども達の中には様々な意見や考えを取り入れ共感する力も育まれていきます。

答えが用意されていない環境問題を解決に導く上では、この共感力が不可欠です。多様な意見を反映させ総合化していくためには、皆の共感力を引き出すことが必要だからです。

1　竜はなぜ湖から姿を消したのか～湖や社会の変化を調べる

八郎湖は、海の近くにある浅瀬の多い湖でした。そのため、生物生産性が高く、昔は魚が湧く湖と言われるほどでした。この頃は、八郎太郎の伝説が人々の中で生きていました。しかしその後、干拓事業に伴う護岸工事で浅瀬が失われたり、防潮水門が設置され海との交流を妨げられたりするなど、湖の環境が大きく変化しました。さらに、生活排水等によって水質が悪化したことで湖内に豊富に生育していたモク（沈水植物群落）が消滅し、魚類も激減しました。湖の環境悪化と共に、八郎湖に対する周辺の人々の関心も薄れていき、人々の心の中に棲んでいた竜（湖へのファンタジー）も忘れられていきました。

このように湖の環境や社会の変化を竜のイメージと結び付けて考えることで、地域を支える大きなつながりの象徴としての竜を呼び戻すという目標を、子ども達が問題解決に向けて共有することができます。ここでは、竜を呼び戻すという目標が自然や社会等の様々な要素を含むことになります。

2　失われたつながりを取り戻すことで竜を呼び戻す物語を考える

民話として伝わる八郎太郎物語では、主人公の竜が山や川、湖など多様な環境を舞台に登場します。この物語そのものが、湖と流域とのつながりを教えています。学習では、昔と今の山や川、湖の変化について、つながりをキーワードに見直していきます。そして、つながりが失われたことで竜だけではなく多くの生き物が姿を消していったことを知ります。

子ども達は山川湖のつながりを知ることで、地域の特色をより理解できるようになります。また、子ども達は地域を支えるつながりを意識して考えることで、今起きている問題の本質や解決の可能性を探る手掛かりを得ることができます。地域にあったつながりが失われた結果様々な問題が起きていることや、問題の解決には地域につながりを取り戻していくことが有効であることを、子ども達は自然に理解していきます。失われたつながりを取り戻し、新たなつながりを創造する物語を考える学習へと展開していきます。

3　山、川、湖、海のつながりを通して、八郎湖の再生を考える

失われたつながりとはどのようなものだったのか、どのようにしたらつながりを取り戻していくことができるのか。そのために、昔の八郎湖の様子や人々の暮らしを地元のお年寄りから聞き取る学習を行い、人々の暮らしと湖がどのようにつながっていたかを学びました。また、校庭のビオトープや川や池、田んぼ、そして湖や水源地などへ行って観察を行い、それらの場所と場所を結ぶ生き物の道（つながり）があることを知りました。

環境が悪化する前の八郎湖には山や川などから多くの生き物たちの道がつながっていたと考え、それらの自然の中のつながり（生きものの道）を、子ども達はドラゴンロード（竜の道）と名付けました。ドラゴンロードを取り戻すことが、竜を呼び戻すこと（八郎湖の再生）につながると子ども達は考え始めました。

4　つながりを取り戻し、湖を再生する実験

この小学校にはコンクリートで造られた観察池がありましたが、子ども達は池の水が年中濁っていたり生き物が少ないことが気になっていました。まず、身近な環境から良くしていこうという提案があり、池の改造（ビオトープ化）を考える学習が始まりました。改造計画を考える時に、昔と今の八郎湖をくらべる学習を行い、池をコンクリート護岸化され水質が悪化した現在の八郎湖「ミニ八郎湖」に見立てました。

このミニ八郎湖に昔の八郎湖にあったつながり（ドラゴンロード）を再現すれば、濁っていた水がきれいになり、生き物も集って来るのではないかという仮説を立てて改造を行っていきました。池の中と陸との間を生き物が移動できるようにコンクリート岸に土砂を入れて段差を無くしたり、浅瀬を造ったり、昔湖に生えていた水草を植えたり、池の上流部分に田んぼを造ったり、池の周りに木を植えたりしました。そのような改造を行っていくと次第に池の水が澄んで透明になり、トンボやカエルなど多くの生き物が住みつくようになりました。

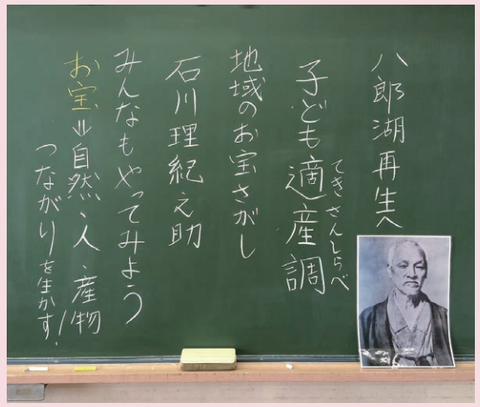
この実験結果をもとに、子ども達は八郎湖に秋田県が造成した浅瀬に行って、在来の水草を植える活動をしました。

5　水源地から八郎湖再生を考える

次に、八郎湖の上流（水源地）から湖の再生への道筋を考えました。学校のビオトープ池の水が澄み生き物が戻って来たように、将来八郎湖の環境が改善されたら生き物は何処から帰って来るのでしょうか。一度いなくなった湖の生き物たちは戻って来ることができるのでしょうか。

そのヒントは、子ども達が米作りの体験に訪れていた湖の水源地の谷津田にありました。この小学校では、田んぼ体験を毎年郷土の偉人石川理紀之助ゆかりの谷津田で行っています。この谷津田は周りを深い森に囲まれ清らかな水が湧いています。また、近くには湧き水を溜めた池（堤）もあり、かつて八郎湖に生育していたモクなどの水草が繁り、多くの生き物が生息しています。環境が悪化した八郎湖を追われた生き物たちや消滅したモクなどが湖の上流である水源地に残されていることを、子ども達は知りました。これらの生き物たちが、ドラゴンロードを通して湖に戻って来るという筋書きが、子ども達の中に浮かんできました。

6　つながりを生むために地域資源を掘り起こす～先人の志を継ぐ



八郎湖再生の物語を作る学習を進めていく中で、子ども達は上記の谷津田のように地域に眠っている資源を掘り起こし、自分たちの物語の中で新しい意味や価値を見出していくことが重要であることに気付きました。実は、そのような地域資源の掘り起こしをした偉大な先人が先に紹介した石川理紀之助であったことを知りました。理紀之助翁は、八郎湖の近く山田村出身の老農（農業指導者）で、生涯を貧農救済に捧げた人物です。理紀之助翁が行った「適産調」は、それぞれの土地の土壌や生産物、人々の生活習慣に至るまで地域資源を徹底的に調べ上げ、地域の自立に役立てようとした調査書です。彼は、これを元に農村の経営計画を立てました。膨大な資料収集は次代を担う人材の育成に役立てるという目的もありました。

この学習を通して、子ども達は自分達が行ってきた学習が、理気之助翁の適産調の精神を受け継いでいることに気づき、自分達こそがその継承者であり、また地域の未来の担い手であるという自覚を持つことになりました。

7　物語の中で、物が人々に語りかけるようになる～お帰り八郎太郎ブランドの提案

子ども達は、この学習を通して地域にある様々な物が物語の中で新しい意味や価値を語り始めることを体験しました。それは、物語（コンテキスト）の中で、様々な物が付加価値を持つようになるという体験です。このように地域の産物に付加価値を生み出していくことは、地域の内発的発展や活性化にもつながります。

子ども達は、八郎湖再生の物語の中から生まれて来た付加価値を持った物（地域ブランド）を増やしていくことが、湖の再生と一体化した地域活性化に結び付くことに気付きました。ここから「お帰り八郎太郎ブランド」の企画会議が始まりました。

企画会議では多数決を行わず、皆で自由に意見を出し合い議論を重ねました。みんなで物語を作る過程で、子ども達は他の人の考えに共感したり、自分の考えに無かった発想を得ることができました。多数決ではなく共感によってまとめていく。そのような体験を通して、子ども達はみんなの思いが込められた統一ブランドを完成させました。

8　物語の力を活かして社会に働きかける

四年生で完成したブランドデザイン（お帰り八郎太郎物語）を、五年生になってから地元の商店街や佃煮組合などに採用してもらうように働きかける活動を行いました。子ども達の提案に共感した生産者や商店などが、八郎湖再生に結び付く環境に配慮した商品に子ども達のブランドマークを付けて販売を行うようになりました。

この学習を通して子ども達の表情はいつも生き生きしていました。地域に夢を持ち、地元で生きていく自信や誇りを持った子ども達が将来この地域の資源を活かした事業を次々と興し、問題解決に向けてポジティブに創造的な姿勢で取り組んでくれることを期待します。